

# 津軽のイタコ

時代の流れとともに消えつつあるもの、あるいはかたちを変えながら受け継がれてゆくもの。民衆のくらしの中に、連続と守り伝えられてきた日本各地の伝統習俗や祭りを記録した映像シリーズ。



●企画  
国立歴史民俗博物館  
●製作 株桜映画社  
●協力 文化庁  
●規格  
16ミリ・カラー・37分  
●販売価格(消費税別)  
16ミリ/250,000円

## 推薦のこぼれ

文化庁文化財保護部  
伝統文化課文化財調査官

大島暁雄

わが国の巫女は元来は神に奉仕し、神と人との仲介をするものであったが、次第に神社から離れて単独のものとなり、共同体的なものから個人的なものへと変化するとともに、その活動内容も呪術的な性格を強めてきた。

こうした中で、民間にあって、憑依させた死霊や生霊の言葉の人々に伝える、いわゆる口寄せを行う巫女を、イタコやイチコ、梓ミコやオガミサマなどと呼ぶ。

これらの巫女は、かつてはわが国に広く存在していた。彼女たちは民間宗教者としてばかりでなく、各地を遍歴しつつ種々の信仰や伝説あるいは芸能や行事などを伝えるなど、文化の伝搬者の役割も果たしていたのである。

こうした巫女の姿が眼前から消えて久しい。しかし、青森県の津軽や田南部藩領の村々では、今でもイタコと呼ばれる盲目の巫女が、口寄せや加持祈禱・占いなどの伝統的巫業とオシラ祭文などの各種の祭文を伝えている。

この映画は、今や消滅の危機に瀕している伝統的な民間巫女の実態を記録し、わが国の基層信仰の一端を明らかにすることを目的に製作されたもので、津軽地方を中心にイタコの伝統的な巫業の様相を、人々との触れ合いとその宗教的風土の中で丹念に記録している。

この映画では特に、口寄せが巧みに構成されていて、イタコと津軽の人々が長い時間をかけて練り上げた優れた劇を思わせる内容となっていること、またイタコが巫業を商売と呼び、周囲もむしろ経済的な行為として認知していることなどが描かれ、この地方でイタコが長く存在してきた理由の一端を推測させる優れた記録となっている。また、イタコの語る祭文からは、文化伝搬者としてのかつての巫女の姿を推測することも可能である。

●配給

## ●—あらすじ

青森県下北半島の霊場恐山、大祭の日。各地から集まってきたイタコたちが「口寄せ」をする。

老イタコ笠井キヨさん（79歳）は、幼い頃視力を失った。師匠の家に弟子入りしたのは、14歳の時。厳しい修業に耐えて、15歳で一本立ち（ミアガリ）した。

イタコは、仕事のことを「商売」という。自宅に祭壇を設け、ふだんはそこを仕事場にしているが、呼ばれればどこにでも出かけていき「口寄せ」をする。春秋のオシラサマの祭日には「オシラサマ遊ばせ」も行う。

しかし、このようなイタコの仕事をするには、江戸時代には弘前市の報恩寺が発行する許可証（カンサツ）が必要であった。明治時代にはいると、行政から「イタコの所業一切禁止」の布告が出された。それでもイタコを求める声が絶えなかった。その仕事は続いてきたのであった。

たび重なる凶作・飢饉にみまわれてきた津軽の風土を生き抜く人々にとって、イタコは必要であった。イタコの語る死者の言葉は、この世で生きていく人々の、心の灯であった。

多くの謎を秘めたまま、イタコは消えていく。彼女たちにはもう、弟子はひとりもない。



## <伝統習俗の記録>

企画：国立歴史民俗博物館  
協力：文化庁 製作：桜映画社

### 有明海の干潟漁

16ミリ・カラー・33分/210,000円  
特有の魚介類が豊富に生息する日本最大の泥状干潟、有明海。沿岸に住む人々の暮らしを支えてきた、干潟独特の伝統漁法の数々は、自然とつきあう人間のあり方を教えてくれる。

### 奥羽の鷹使い

—日本の狩猟習俗—

16ミリ・カラー・33分/200,000円  
奥羽地方では、クマタカを飼いながらして野ウサギ等を捕らえる鷹狩りが伝承されてきた。滅びゆく伝統習俗を記録し、自然と共存し調和を保って生きた山の民の息づかいを伝える。

## <民俗芸能の心>

企画：財団法人伝統文化振興財団  
製作：桜映画社

### ねぶた祭り

—津軽びとの夏—

16ミリ・カラー・34分/210,000円  
東北地方を代表する夏の「ねぶた祭り」。青森ねぶたを中心に、各地に残る様々なねぶたを紹介しながら、ねぶた師による灯籠制作の様子から祭りの準備・当日までほぼ一年を追う。北国の夏、祭りで一気に爆発する人々のエネルギーを描く。

### 舞うがごとく翔ぶがごとく

—奥三河の花祭—

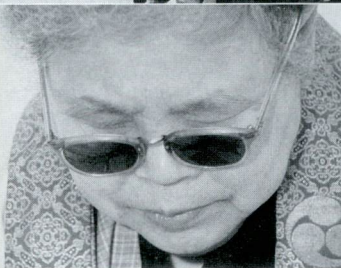
16ミリ・カラー・34分/210,000円  
愛知県奥三河地方に700余年にわたり、伝承されてきた「花祭」を記録。夜を徹して舞い続ける人々の熱気と興奮は、大自然の眩きに耳を傾けてきた日本人の心を描き出す。

### 秩父の夜祭り

—山波の音が聞こえる—

16ミリ・カラー・34分/210,000円  
秩父盆地の村々に今日まで残されてきた多くの祭りや行事を紹介する。そして一年の集大成ともいえるべき「秩父夜祭」を通して、人々の生活に根づいた祭りの持つ意味を考える。

※上記の作品にはビデオテープもあります。



### ●特別協力

五所川原市 笠井キヨ  
弘前大学教育学部教授  
笹森建英

### ●撮影協力

青森県教育委員会  
弘前市教育委員会  
五所川原市教育委員会  
金木町教育委員会  
鶴田町  
青森県立郷土館  
弘前市立図書館  
川倉賽の河原構中  
霊場恐山寺務所  
弘前市 長勝寺  
報恩寺  
専修寺

五所川原市桜田の皆さん  
弘前市小栗山の皆さん  
鶴田町 石村智徳

### [製作スタッフ]

製作＝村山和雄  
脚本・演出＝大島善助  
演出助手＝広瀬謙一  
撮影＝山屋恵司  
松井美喜夫  
照明＝水村富雄  
現地録音＝樋口克雄  
編集＝近藤光雄  
加納宗子  
音楽＝長沢勝俊  
録音＝アオイスタジオ  
現像＝IMAGICA  
語り＝山本 圭

### [用語解説]

- ◎イタコマチ＝神社仏閣の縁日などに、大勢のイタコが集まって口寄せを行うことをいう。
- ◎イタコの祭文＝神仏を呼び寄せるための祝詞や経文、昔話や神仏の由来譚などの語り物の総称。
- ◎巫具＝巫女が巫業を行うために用いる用具で、神や仏を下ろすための数珠や弓・太鼓と、巫女の守り神を入れたお守りなどがある。
- ◎ユルシ＝イタコになるための修業を終えて一本立ちすることを師匠から許されること。このとき師匠から巫具一式が贈られる。
- ◎オシラサマ＝東北地方一帯に分布する民間信仰の神で、紫桑で娘と馬の2体を作り1対として祀る。蚕の神様とされ、旧家や村で所有する。